様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月 3 日現在

機関番号：34307
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 年度 ～2012 年度
課題番号： 22531076

研究課題名（和文）母親の被害的認知による虐待メカニズムの解明～被害的認知尺度の開発～

研究課題名（英文）　The abuse mechanism by a mother's victim cognition.
～Development of the victim cognitive measure～

研究代表者
川西　千弘（KAWANISHI　CHIHIRO）
京都光華女子大学・人文学部・教授
研究者番号：70278547

研究成果の概要（和文）：　本研究は母親の子どもや養育への被害的認知に注目し，これを測定する潜在的（被害-加害 IAT）および顕在的測度（被害意識尺度）を開発した。共分散構造分析の結果，顕在的および潜在的な被害意識は，不適切な養育行動に影響を及ぼしていることが示された。さらに，これら個人差は，場面想定法に登場する幼児への認知的歪曲（印象，行動の帰属，幼児への対処方略）を生じさせることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research developed harm－be harmed IAT(implicit measure) and victim consciousness scale (explicit measures) of mothers' victim cognition to their child or bringing-up their child. A CSA(Covariance Structure Analysis) revealed a significant causal relationship between their implicit / explicit victim cognitions and misbehaviors to their children. Furthermore, implicit / explicit victim cognitions were also related to the cognitive distortion (on impression, attribution and nursing performance)to the infant who appears in the hypothetical scenario experiment.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：1. 虐待　2. リスクアセスメント　3. 被害的認知　4. IAT　5. 潜在的連合

１．研究開始当初の背景

虐待が多発するアメリカでは，社会的認知の理論や手法を活用して虐待メカニズムを解明しようとする研究が盛んである（Milner ら,1993, 2000；Bugental ら 1998,2004）。これら一連の研究は，一様に虐待リスクの高い親は子どもや養育に対し独特の“認知的歪曲”を持つことを示しており，近年ではこれを是正する教育プログラムの有効性が報告されるようになった（Crouch & Milner,2008）。だが，日本ではこの虐待傾向者の認知的歪曲を精査する研究は殆ど行われていない。

２．研究の目的

そこで，筆者らは日本独自の虐待実態を鑑み，親の子どもへの被害的認知に着目し，情報処理的アプローチから体系的に虐待メカニズムを解明することを目指す。

なお，本研究の目的は以下の 2 点である。
(1)一連の研究基礎となる被害的認知の個人差を特定する潜在的測度（以下，被害 - 加害 IAT と記す）と顕在的測度（以下「被害意識尺度」と記す）を独自に開発し，母親の感情および養育行動への影響を検証する。
(2)被害的認知から不適切な養育行動への経

路を明らかにするために，上記両測度を用いて個人差を弁別し，これらが子どもに対する母親の知覚，解釈という様々な情報処理における“歪み（認知的歪曲）”とどのような関連性を持つのかを明らかにする。

３．研究の方法

乳幼児を養育中の母親258名(2011年度163名;2012年度95名)を対象に,被害-加害IAT,質問紙という順で，いずれも個別に実施し，最後に詳細なディブリーフィングを行い，同意を得た。

(1)被害-加害IAT　対象概念は「自分」「子ども」，属性概念は「被害」「加害」とし，刺激語は「自身」「幼児」など各5項目であった。

(2)質問紙　**①被害意識尺度**:母親の子どもや養育に対する意識を調査するため，中谷・中谷（2006）他を参考に62項目の尺度を作成した。**②感情尺度**：母親の現在の感情や精神状態を明らかにするため，寺崎・岸本・古賀(1992)他を参考に23項目の尺度を作成した。**③養育行動尺度**：育児行動の内容と頻度を明らかにするため，中嶋（2004）他を参考に27項目の尺度を作成した。上記3尺度はいずれも5件法で回答を求めた。

なお，2012年度のみこれらに加えて，IAT実施前に場面想定法を実施した。

(3)場面想定法　幼児の行動がネガティブな母子相互場面（以下，無場面と記す）とその行動を緩和する情報を付加した場面（以下，有場面と記す）を順次紙面提示し，各場面につき，登場する①幼児の印象②幼児の行動の帰属③幼児への対処方略について，いずれもSD法（7件法）で回答を求めた。

４．研究成果

研究の主な成果は，以下(1)～(3)である。

(1)尺度の開発　**①被害-加害IAT**　Greenwald, Nosek & Banaji(2003)に基づきDスコアを算出し，得点が小さいほど子どもに比べ自分と被害との連合が強くなるよう数値化した。

②被害意識尺度　因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったところ，以下の5因子が抽出された(“子どもがいてくれるので，人生が充実したと思う”など「成長充実」〈7項目〉;“子どものために，仕事や趣味など自分のしたいことができない”など「アイデンティティ喪失感」〈6項目〉;“子どもにバカにされているような気がする”など「被害的解釈」〈8項目〉;“子どもをみていると自分の悪い部分が映し出されているように思う”など「短所への脅迫」〈4項目〉;“子どもは親を喜ばす存在であるべきだと思う”など「過剰期待」〈4項目〉)。被害意識尺度は，包括的に母親の意識について尋ねるためポジティブな側面の項目も含んでいたが，それらが「成長充実」として抽出された。内容的には「アイデンティティ喪失感」「被害的解釈」「短所への脅迫」が被害意識に関連し，「過剰期待」には権威的あるいは高圧的な意識が反映されていた。なお，本研究の主たる目的が被害（加害）的認知にあるため，「成長充実」「過剰期待」は以下の報告から除外する。

③感情尺度　因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったところ，以下の4因子が抽出された（“うれしい”など「癒され感」〈6項目〉;“あせる”など「焦燥感」〈5項目〉;“むなしい”など「虚無感」〈4項目〉;“やりなおしたい”など「後悔」〈3項目〉)。

④養育行動尺度　先行研究を参考に下位尺度を構成し，α係数を算出した（“たたく”など「身体的暴力」4項目（α=.58）;“放っておく”など「ネグレクト」3項目（α=.54）;“傷つくようなことをいう”など「心理的嫌がらせ」4項目（α=.60），“機嫌をとる”など「甘やかし」4項目（α=.52）。どの下位尺度も内的整合性が十分ではないが，これ以上項目整理をしてもα係数が改善せず，平均値の安定性を考慮し，これらの項目内容で下位尺度を構成した。

⑤場面想定法　印象の5項目でα係数を算出したところ，いずれの場面でも「活発な」を除くと十分な内的整合性が確認されたので，4項目の平均値を以下の分析に用いた（緩和情報無場面α=.768：有場面α=.730)。しかし，帰属や対処方略では低いα値しか得られなかったので，これらは各項目で分析した。

(2) 被害的認知（潜在的・IAT,顕在的・被害意識）が感情，養育行動へ及ぼす影響

母親の子どもや養育に対する被害的認知（顕在的および潜在的）が，直接あるいはネガティブ感情を介して，不適切な養育行動を促すという流れを想定し，予備分析結果を基に共分散構造分析を行った。母数の推定方法には最尤法を用いた。分析の結果，適合度は$\chi^2(18)=15.54$ (n.s.) GFI=.986, AGFI=.965, CFI=1.000, RMSEA=.000で，十分な値が示された。図1のとおり，まず潜在的測度の被害‐加害IATでは，子どもに比べ自分と被害の潜在的連合が強いことが「身体的暴力」の使用を促進させ，かつ子どもに対して「心理的嫌がらせ」を行う傾向が促されることが示された。次に，顕在的測度である「アイデンティティ喪失感」は直接「甘やかし」を，また「被害的解釈」と「短所への脅迫」は直接「身体的暴力」「ネグレクト」および「心理的嫌がらせ」を引き起こすことが明らかになった。この他「アイデンティティ喪失感」と「被害的解釈」は「虚無感」を強め，「虚無感」が強まることで「身体的暴力」を手控えるようになることも示された。

これらのことから，顕在的および潜在的に被害的認知をもつことで不適切な養育行動が促進されていくことが実証された。

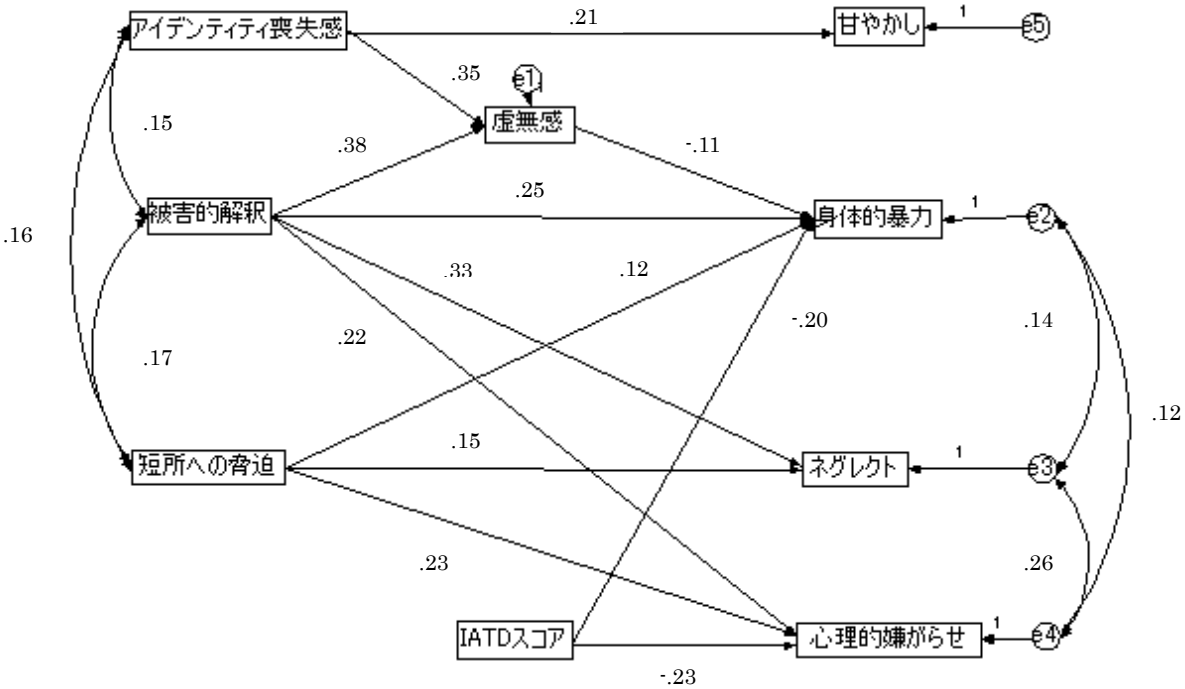

図 1. 被害意識・感情・IAT が養育行動に及ぼす影響

(3)被害的認知と知覚・解釈への歪みとの関連性

この項では，被害的認知（潜在的・被害 - 加害 IAT,顕在的・被害意識,）の個人差が場面想定法に登場する幼児の印象，行動の帰属および対処方略にどのような相異をもたらすのかを検証した。具体的には，2012 年度の参加者 95 名を対象に以下の分析を行った。IAT では（被害群・中群・加害群），被害意識ではそれぞれの下位尺度平均値を基に上位・下位 25%を抽出して高群・低群とし，それらと場面情報（緩和情報無・有）との 2×2（IAT は 3×2）の分散分析を行った。なお，前者は参加者間要因，後者は参加者内要因であった。

①被害 - 加害 IAT　自分と被害・加害いずれの潜在的連合も弱い人（中群～健全的～）は，緩和情報に敏感に気づき幼児のネガティブな行動をより「意図的ではない」と割り引いて帰属することが示された（交互作用 $F(2,91)=3.05, p<.1$，下位検定結果 IAT 中群のみ $F(1,31)=6.53, p<.05$）。また，自分と加害の潜在的連合が強い人は被害との潜在的連合が強い人より，幼児のネガティブな行動に接するとより「愛情が萎える」傾向が示された（$F(2,90)=2.62, p<.1$）。

表1. IATと緩和情報ごとの平均値(SD)

	低群(被害)		中群		高群(加害)	
緩和情報	無	有	無	有	無	有
非意図的-意図的(帰属)	4.23(1.50)	4.52(1.82)	3.84(1.50)	4.69(1.45)	4.32(1.60)	3.97(1.40)
愛情が萎える-増す(対処法略)	4.42(0.76)	4.16(1.00)	4.66(0.83)	4.44(0.91)	4.93(0.83)	4.50(1.11)

＊左側の項目に「とてもあてはまる」を7として数値化

②被害意識尺度　【アイデンティティ喪失感】アイデンティティー喪失感高群のほうが低群より幼児に否定的印象をもつ傾向が示された（$F(1,46)=3.83, p<.1$）。また，高群が低群よりネガティブな幼児の行動をより「パーソナリティのせいだ」「悪意がある」「常に繰り返される」と帰属しがちであった（順に $F(1,46)=3.03, p<.1$; $F(1,46)=6.91$; $F(1,46)=4.21$, 共に $p<.05$）。また，低群では緩和情報に敏感に反応してより「意図的ではない」と解釈し（交互作用（$F(1,46)=3.81, p<.1$ 下位検定結果 $F(1,24)=4.51, p<.05$,），緩和情報が有っても高群ではより「意図的だ」と帰属した（$F(1,46)=5.00, p<.05$）。さらに，高群のほうが幼児のネガティブな行動に対しより「愛情が萎える」と判断した（$F(1,46)=4.58, p<.01$）。

表2. アイデンティティ喪失感と緩和情報ごとの平均値(SD)

	低群		高群	
緩和情報	無	有	無	有
肯定的-否定的(印象)	4.02(0.55)	4.26(0.76)	3.62(0.84)	3.97(0.70)
状況-パーソナリティ(帰属)	4.00(1.50)	4.88(1.36)	3.35(1.19)	4.48(1.38)
善意-悪意(帰属)	4.08(0.70)	4.16(0.69)	3.65(0.83)	3.83(0.57)
非意図的-意図的(帰属)	4.00(1.38)	4.72(1.21)	4.13(1.52)	3.87(1.42)
その時-常に(帰属)	3.36(1.32)	4.04(1.74)	2.65(1.19)	3.43(1.44)
愛情が萎える-増す(対処法略)	4.52(0.87)	4.16(0.80)	5.04(0.82)	4.48(1.04)

＊左側の項目に「とてもあてはまる」を7として数値化

【被害的解釈】被害的解釈高群が低群よりネガティブな幼児の行動に「悪意がある」「意図的だ」と判断した（順に F(1,51)=5.52；F(1,52)=5.56，共に p<.05)。また，高群が低群よりたたくなどの「身体的にしかる」傾向（F(1,51)=2.99，p<.1）や「愛情が萎える」ことが示された（F(1,51)=7.15，p<.01)。

表3. 被害的解釈と緩和情報ごとの平均値(SD)

	低群		高群	
緩和情報	無	有	無	有
善意-悪意（帰属）	4.23(0.63)	4.40(1.13)	3.78(0.74)	3.91(1.00)
非意図的-意図的（帰属）	4.48(1.57)	5.03(1.49)	3.87(1.58)	4.04(1.66)
身体的しかる-ほめる（対処方略）	4.33(0.92)	4.37(0.81)	4.65(1.11)	4.87(1.06)
愛情が萎える-増す（対処法略）	4.50(0.73)	4.27(0.83)	5.00(0.60)	4.74(1.14)

＊左側の項目に「とてもあてはまる」を7として数値化

【短所への脅迫】短所への脅迫高群が低群より幼児に否定的印象を抱いた F(1,51)=4.45，p<.05)。また，高群が低群よりネガティブな幼児の行動をより「パーソナリティのせいだ」「意図的だ」「常に繰り返される」と帰属した（順に F(1,51)=8.75；F(1,52)=5.78；F(1,51)=4.78,共に p<.05)。さらに，低群では緩和情報に気づきより「悪意はない」と判断し（交互作用（F(1,51)=3.87,p<.1 下位検定結果 F(1,28)=6.04,p<.05)，緩和情報が有る場面でも高群は低群より「悪意がある」と解釈した（F(1,51)=12.26,p<.01)。さらに，高群が低群より,「言葉でしかる」「愛情が萎える」「習慣づかないよう説明・誘導する」さらに「身体的にしかる」傾向が示された（順に，F(1,51)=4.50；F(1,51)=9.11；F(1,52)=4.82,共に p<.05；F(1,51)=3.97,p<.1)。

これらのことから，潜在的および顕在的に被害的認知の高い人は，一般的な幼児のネガティブな行動に対し，その行動をより故意で悪意が有るなどと帰属・解釈しがちで，かつネガティブ行動の緩和情報へ敏感に反応できないことが示された。また，顕在的測度の「アイデンティティ喪失感」や「短所への脅迫」の高い人は，登場する幼児に対し否定的印象を持つことが明らかになった。特に「短所への脅迫」感の高い人は，より高圧的対処方略を用いやすいことも示された。以上のことから，ネガティブな幼児の行動を解釈する際，潜在的および顕在的な被害的認知が，情報処理上の様々な歪曲と深い関連を持つことが示されたと言えよう。

表4. 短所への脅迫と緩和情報ごとの平均値(SD)

	低群		高群	
緩和情報	無	有	無	有
肯定的-否定的（印象）	4.04(0.73)	4.36(0,63)	3.79(0.65)	3.85(0.96)
状況-パーソナリティ（帰属）	3.97(1.38)	5.03(1.30)	3.42(1.35)	3.83(1.46)
善意-悪意（帰属）	4.34(0.81)	4.76(1.06)	3.92(0.88)	3.71(1.12)
非意図的-意図的（帰属）	4.67(1.52)	5.10(1.52)	4.04(1.71)	4.21(1.41)
その時-常に（帰属）	3.34(1.54)	4.21(1.88)	2.67(1.24)	3.29(1.60)
言葉でしかる-ほめる（対処方略）	5.55(0.95)	4.90(1.18)	5.88(0.80)	5.46(0.93)
愛情が萎える-増す（対処法略）	4.48(0.83)	4.14(1.09)	5.00(0.72)	4.83(1.05)
オロオロ-説明誘導（対処方略）	2.03(0.93)	2.50(1.25)	1.67(0.70)	1.88(1.03)
身体的しかる-ほめる（対処方略）	4.24(0.92)	4.34(1.20)	4.71(0.91)	4.79(0.78)

＊左側の項目に「とてもあてはまる」を7として数値化

(4)成果の国内外における位置づけとインパクト

①“被害的認知”への注目　欧米諸国のような相互独立的自己観の文化圏では，自己と重要他者（子どもを含む）を明確に区別し，自己の独自性や存在価値を誇示することが重要とされるため，親子間でも力の優劣への関心が高まり，それが虐待を生む背景となる（Bugental,1998）。しかし，日本のような相互依存的自己観の文化圏では，自己と重要他者はそれぞれの属性を共有し，関係の適切さを維持することが重視される（Markus & Kitayama,1991）。さらに，母性の国といわれる日本では母親への役割期待が過剰で，育児責任を一身に負うあまり不安や挫折感を募らせる（大日向，2002）中で，子どもや養育に対する被害的認知が発生し，それが虐待に繋がっている。Dodge ら(1986)によると，この被害的認知は相手の意図をことさら悪意に解釈する敵意帰属傾向を生み，相手への攻撃行動を誘発させる。

このような着目から，本研究では日本の母親の特殊な関係性病理に注目し，子どもや養育に対する母親の被害的認知を多角的視点から取り上げた。そしてこの被害的認知が,様々なネガティブ感情や不適切な養育行動へ結びつくこと，また知覚・解釈などの歪曲を促進することなど情報処理的アプローチからその実態を明らかにした。

②顕在的・潜在的測度併用による認知的歪曲の解明　Milner や Bugental らが開発したのは共に質問紙（顕在的測度）のみであるが，本研究では独自に潜在的測度(被害-加害 IAT)を開発した。Greenwald，A.G.ら（2009）は，質問紙調査が社会的望ましさの影響を強く受け信頼性が損なわれるのに対し，IAT は多くの社会的行動，特に測定する内容が社会的に

センシティブであるほど，有用性が高まることを見出した。

そこで，本研究では両測度から母親の子どもへの被害的認知の個人差を弁別し，この個人差と認知的歪曲との関連性を詳細に検討した。その結果，上述したように自分と被害の潜在的連合が強いことが様々な子どもや養育への弊害と関連することが示された。保護者が自覚しえない心理傾向に自ら気づき，それがいかなる情報処理の歪曲を招くのかを具体的に知ることは，未然に虐待を予防する措置として有用であるばかりか，虐待防止の啓蒙・教育への有効な提言が可能になる。本研究で開発した被害-加害 IAT は，今後より妥当性・信頼性を確認していく必要はあるが，それを実現可能とするツールであり，本研究結果は、その有用性の一端を示したと言えよう。

(5) 今後の展望

しかし，この被害的認知から不適切な養育行動への経路については，より詳細な検討が必要である。その中でも特に今後の課題として重要と思われる 2 点を以下に記す。**①認知的歪曲の特定化**　例えば，Milner ら(1993；2000）は，身体的虐待リスクの高い親は，不正確かつバイアスのかかったスキーマ（認知的枠組み）を持ち，かつ子育てにおいてその歪んだスキーマに依拠した情報処理をすることに注目し，1.知覚，2.解釈と評価，3.情報統合と反応選択，4.反応の実行とモニタリングにおける歪曲の存在を実証して，身体的虐待の社会的情報処理モデルを提唱した。これらのことから，本研究で取り上げた顕在的および潜在的な被害的認知が，情報処理上のどの段階で深刻な歪曲を生じさせ，そのうちいかなる歪曲が不適切な反応へリンクしやすいのか？またいかなる状況がそのリンクのしやすさを促進したり，抑制したりするのか？などについて詳細な特定が必要である。**②教育プログラムの提案**　そのような歪曲の特定化が進めば，日本独特の関係性の病理である虐待実態に迫り，母親の被害的認知からの不適切行動へのメカニズムが明らかになるため，認知的歪曲の自覚と改善を目指す効果的な手法やツールの提案が可能になる。そこで，今後は潜在的測度である被害-加害 IAT と顕在的測度である被害意識尺度について，より妥当性・信頼性を高め，必要な改善を加えること，さらに一般化する際の注意点などについて精査していく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

(1)「拡散モデルに基づく潜在的連合テストデータの分析」土居淳子・川西千弘，京都光華女子大学研究紀要，査読なし，第 50 号，111-122，2012.

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) 「母親の養育への被害意識が幼児の行動解釈に及ぼす影響」川西千弘・土居淳子，日本心理学会第 77 回大会発表論文集，査読なし，in press，2013

(2) “The Implicit Association Test and its diffusion-model analysis － Application to measure mothers’ implicit hostile attribution to their child－” Junko Inoue (Doi), Chihiro Kawanishi & Shinji Doi, Abstract of BIOCOMP2012 (Mathematical Modeling and Computational Topics in Biosciences) , 査読有, pp.104-105 , 2012..6.6

(3)「乳幼児を育てる母親の意識と行動」川西千弘・土居淳子，日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集，査読なし，P281，2012.11.18

〔図書〕（計 1 件）

(1)「虐待リスクアセスメント―子どもを虐待から守るために―」川西千弘・土居淳子，『ひと・文化・発達―関係を見つめなおす人間科学の視点―』第 6 章，pp.107-127，ナカニシヤ出版，2010.

６．研究組織

(1)研究代表者

川西　千弘　（KAWANISHI　CHIHIRO）
京都光華女子大学　人文学部・教授
研究者番号：70278547

(2)研究分担者

土居　淳子　（DOI JUNKO）
京都光華女子大学　キャリア形成学部・教授
研究者番号：00301713